

これからもサンタクロース

高尾 里甫

1

鳥肌が立った。情けないくらいビクツとした。レジから取り出した小銭を全部落とした。

クリスマスイブの夜六時。バイト先のホビーショップにて、数多のサンタクロース、もとのお父さん達相手にレジ打ちに勤しんでいたころ。フロアは暖房を効かせ暖まっているにも関わらず、俺を含めその場にいたほとんどの人にターキーもびつくりの鳥肌が立った。全身から冷たい汗が噴き出している。

周囲の視線は一気に人形売り場を集まっていた。クマのぬいぐるみを抱えた痩せた男性と二人の少女。少女のうち一人はその年頃特有のませた得意面をしていて、一方もう一人はというと、目に涙を浮かべながら男性を睨み付けている。

「お父さんのウソつき！ サンタさんなんて、やっぱり、

いないんじゃない！」

「ね、言ったでしょ？ サンタさんなんて、いるわけないじゃない。あなたのお父さんだけじゃないわ、ここにいるオトナみんな、サンタさんのフリした人たちのよ」

瞬間、眩暈がした。これはあれだ、サンタさんを信じていた女の子が、お友達にそそのかされて真実知っちゃったパターンだ。

お父さんの方を一瞥する。絵に描いたような「心ここに有らず」な状態であった。視線は娘に向けて固定したまま、口元はあんぐりとだらしなく開けられ、「あ、ああ」と情けない声を漏らしている。あまりのいたたまれなさに周囲のお父さん達もそそくさとその場から離れようとしていた。というよりも、我関せずと早く用事を済ませてこの場から逃げようとしている。かく言う俺もなにか気の利いたことができるわけでもなく、レジ打ちをしながらお父さん達に営業スマイルを向ける作業に専念することとした。

「お父さんなんて、大っ嫌い！」

切り裂くような声が轟く。数秒の沈黙が流れた後、次に聞こえたのは一つの遠ざかる小さな足音だった。

「じゃあね、『サンタさん』？」

もう一人いた得意顔娘が念を押すように告げて駆けだす。お父さんかというと、こちらはもう完全に死刑宣告されてフリーズ状態である。これはさすがに可哀想になってきたのか、数人の同志に慰められる始末であった。

「いつかは通る道とはいえ、あれはさすがにきついなあ」  
俺のレジに並んだお父さんのうち一人が呟く。誰もそれに答えることはなかったが、無言のうちの肯定と、加えてそれが自分じゃなかった安堵がありありと窺い知れた。

目の前のカウンターにラジコンカーのケースが置かれる。  
「あ、いらっしやいませ」

ついついそれを無言でそれを受け取ってしまうところだった。寸でのところで言葉を足しつける。お客の機嫌を損ねてしまったのではないかと顔を窺うと、相手は相手ですら参ったような表情で肩をすくませ笑っていた。

「あんなもの見せられちゃうとね」

些かの気まずさと共にケースについているバーコードを読み取ると、ピツという電子音が、乾いた空気に響いた。

「天堂君、今日はもうあがつていいよ」

例のハプニングがあつてから、さらに三時間が経過した夜九時。レジに並ぶお客が途絶えた隙を見計り店長が俺の肩を叩いてきた。

「え、いいんですか」

「だって今日はクリスマススイブだよ？ 君みたいな大学生が、こんな雑居ビルの一角でバイトだなんて淋しいじゃないか」

誰かと予定とかあるんだろう？

目尻の皺を深くしながら微笑む店長。お言葉ですけど、そんなことないからここにいますよ？

「まあ、仮になにもなかったとしても、実家のお母さんに電話くらいしてあげたらいいよ」

やっぱり予定ないこと知ってますよね。

まあまあ、と背中を押されるように控室に追いやられる。全く、気を遣われているのか遣われてないんだか。

明るい表とは打って変わってアルミ製の質素な扉の前に

辿り着く。さすがに廊下まで出ると肌寒いもので、控室に入る前に二、三度手を擦る。ただ実際に挿んだドアノブは予想していた以上に冷たく、今日という日がどれだけ寒いのかを改めて思い知らせてきた。

強張った手でドアノブを回すと、中には髪の毛の長い女性がひとり、机に突っ伏して眠っている。

「その歳で惰眠を貪ってもプレゼントなんてありませんよ生部先輩」

「――はり玻璃先輩って呼んでって、いつも言ってるよね」

鼻で息を吹き、眉間に深く皺を寄せながら起き上げる先輩。

さらさらとした黒髪が顔の前に垂れて貞子のようになっている。

「なに、天堂君もう上がりなの」

「はい。店長が実家の母親に電話してやれって」

ふーん。

先輩は机からのろのろと立ち上がると、溜め息なのか、それとも深呼吸なのかよくわからない息を吐いた。その前にまず髪を整えましょうか？

「てか俺は良くて先輩はまだ上がれないんですね」

「あたしはあれだ、一二時から彼氏いない同士で『非モテ女の集い』をするって言ってるから直前までは働くわ。

あんたも『非モテ女の集い』、来る？」

「遠慮しておきます。第一、俺男ですし」

あつそ。つまんない。

ようやく髪を後ろへおろし一束に結ぶと、せっせと扉へと向かう。

「あ、生部先輩」

「なに」

クリスマスイブの夜に似つかわしくない刺々しい眼光でぎろりと睨んでくる先輩。顔、洗った方がいいんじゃないかな。

「なに？」

蛇ににらまれた蛙のように硬直していると、さつきより強い語気で訝しむように聞き直される。

「いや、その、サンタクロースってマジでいるのかなあ、と思ってる」

「はい？」

いや、予想はしてましたけどねその反応。

誤魔化すように会釈すると、控室の奥の更衣室へと歩みを進める。

全く、我ながらなにを寝惚けたことを。顔を洗った方が良いのは俺の方かもしれない。

「てかあれか。さっきの女の子の泣き声。あれのこと？」

「まあ、そんなとこです」

「いるよ。サンタクロース」

「ですよ、いませんよね」

——はい？

思わぬ返答に声を裏返しながら振り返る。ドアを半開きにした先輩は、白い歯を見せニツと笑うと、子どもじみた笑みを浮かべながらこちらを指さし言った。

「衛星で調べたら、きつと今頃北極からせつせと南下していくのが見えるんじゃない」

じゃ。

軽やかな足取りで出てゆく先輩。俺は先輩が開けたまま放置して行ったドアを閉めると、改めて更衣室に入る。

——いるよ。サンタクロース。

どこまで本気なんだろう。まさか、本当に信じている、

なんてことはないだろうな。

### 3

ビルから出ると、外はさらに突き刺すような寒さだった。ワイシャツの上にセーターを着て、さらにその上にコートを着ているもんだから、上半身はそこそこ暖かいけれども無防備な顔と手がピリピリする。

「ああ、どうすつかなあ……」

独り言がつい口に出る。類は友を呼ぶとはよく言ったもので、俺の友人は基本みんなバイトか研究室に籠りきりである。本当に母親に電話するしかやることはない。

仕方なしにと言ってはなんだけれど、スマホが入っているポケットに手をつ突つ込む。

「あー、あつたかい」

このまま手え出したくない。そうだよ、きつとスマホの充電も切れてるよ。家に帰るまでは少なくともこのままでもいいや。

強めの風に吹かれて走るわけにもいかず、速足ぐらいで

電停に向かう。帰ったらまずなにをしよう。そっか母親に電話しなくちゃ。あと晩メシどうしよう。今日クリスマスイブだから、一人外食はやっぱイタいし自分でメシ作んなきゃいけないでしょう。あー、もしかしたらポツチでもイブ悪くないかも楽しい悩みが尽きないしー。

——深い、深い溜め息が漏れた。歩みが一気に遅くなる。しばらくして電停に着くと、ホームにあがるやいなや壁にもたれかかり、項垂れた。

大通りに出た瞬間目に入るカップル、リア充、人の群れ。人の波の中に放り出されるとは、まさにこんな感じなのだろうか。

今度は勢いよく顔を上げ天を仰いだ。今宵の空は聖夜にも関わらず星ひとつ見えず、それどころか真っ黒な雲だけが頭上に広がっている。帰りたい早く帰りたい。この現実から目を逸らしたい。

——ずびっ。

不意に、隣から鼻を吸る音が聞こえる。それもただ単に寒いから、というものではなく、長時間そこにいたことが容易に推測できる、鼻水を含んだ音。

何気なしに音源の方を見る。すると、そこには紛うことなき例の「サンタさん」がいた。

「あ、アンタは」

しまった。思いがけない再会について話しかけそうになるが、良く考えなくとも向こうは俺を知らないだろうし、あと、正直あまり関わりたくない。前言を撤回して可及的速やかな退散を試みる。が、遅かった。

「貴方は、さっきのお店の」

顔覚えられてたよ。いつ覚えてんだ。

「あ、ええ。まあ。……そういえば、結局買わなかったんですね、クマ」

「まあね。娘にあんなところを見られてしまったし、それにお店にも迷惑をかけてしまったし」

——娘が、まだ、家に帰っていないみたいだね。

「は？」

唐突に言われた言葉が理解できずに男性を凝視する。

咳をするように笑う男性。それでこんなところに何時間もいたというのか。

「ああ、申し遅れました。私、尾張一郎と申します。先程

はご迷惑をおかけいたしました」

「え、あの……ありがとうございます。あ、俺は天堂って  
言います」

脈絡もなく差し出される名刺。一介の大学生が名刺の受け取り方なんて当然知っている訳もなく、つい片手で受けてか尾張さん大病院の重役さんじゃないですかマジですか。改めて尾張さんを見てみる。歳はだいたい四〇代後半。

広々とした額、薄い白髪、輪郭がかなりずれて見えるほどに度が強いであろう眼鏡。そして何よりも細い。普通に腕とかぱっきり折れそう。しかも今は弱気になっっているものだからさらに小さく見える。これで去年まで「サンタさん」してたのか。いや、これはきつと娘が寝てる間にこっそりプレゼント置いていったクチだろうなあ。

「え、で、娘さん大丈夫なんすか」

「——そろそろ警察にも届けないとまずいですよね。どこに行ったのか、皆目見当もつかないもので」

消え入りそうな声で言う。尋ねられてる？

「ああ、そうですよね……」

そんなこと聞かれても。悪気とかじゃなくて、初対面の人の娘がどこにいるかなんて俺には到底予想もつかないし、できることなら勘弁願いたいんだけど、それは良心が許してくれない。

「……」

再び流れる沈黙。気が付けばもう結構な数の電車に乗ることもできずにいる気がする。

そうしてずっと脳をフル稼働させていたからであろうか、沈黙を破ったのは誰の声でもなく、ただの俺の腹の虫であった。

「……」

きよとんととしてこちらの腹部を凝視する尾張さん。もう固まるしかない俺。恐る恐る彼の顔色を窺うと、彼は困ったような表情をした後で背伸びを始め、言った。

「とりあえず、どこかで何かコーヒーでもいかがですか」

あ、宜しくお願いします。

「遠慮なさないでください。私も丁度、暖をとりたいと思っていたところなので」

まだまだ喫茶店は夫婦や若いカップルで埋め尽くされている夜一〇時半。警察へ捜索願を出した俺と尾張さんは、流れとはいえ明らかに場違い感と状況が読めていない感とを醸し出しつつ軽食を摂っていた。尾張さんはコーヒー、俺は紅茶とサンドイッチである。

「いやでも本当にすみません。こんな時に、それもこんな高そうな喫茶店で、しかも奢って頂けるなんて」

「いや、私も少々混乱してしまして。闇雲に探しても娘が見つかるかなんてわかりません。とにかく、落ち着かなくては、と思ったんです」

どうリアクションしたら良いものか図りかね、おしぼりで入念に手を拭く。いざという時、人はこうも思考だけでなく色々と停止するものなのか。

「というのね、うちの娘——せのか、といいます。今年でもう八つ。サンタクロースという存在をまだ信じているのは、今の時代遅れているのか、それともまだそれで普通なのかはわかりません」

それは確かに思った。最近の子がませている、というか悟っている、というのかはわからないけれど。

「サンタクロース……」

「天堂君、だっけ。君はサンタクロースの存在をいつまで信じていたんだい。若い人の意見を聞きたい」

いつまで、信じていたか。サンタクロースを。

特に意味もなく脳内で言葉を反芻する。いつまでだっけ。思いつけるのは、なぜかサンタを信じていたころよりも、サンタの正体が親であって、それを一体どうやって確かめてやろうかとする好奇心だけだった。

「どうなんだい」

「……覚えて、ないっす」

「そうか」

尾張さんのコーヒーからはもう湯気は出ていない。何となく尾張さんの顔を直接見ることができなくてコーヒーの水面を見つめてみるが、コーヒーの色が暗すぎて全く顔色が窺えない。

「私は、あと何年サンタクロースでいられるのだろう」

尾張さんがぼつりと呟く。思わず彼の表情を一瞥すると、

彼もまた、俺の紅茶の水面をじっと見つめていた。

「尾張さん……？」

「去年は、もつと小さな猫の人形だったんだ。その前は、確か手鏡だった」

少し言葉を口にするだけでも喉が渇くのか、尾張さんはやつとコーヒーに口をつけると、浅く、濃い一息を吐いた。

「毎年、毎年。プレゼントが大きくなっていく。娘の夢が大きくなっていつているのか、はたまた」

私が、小さくなっているのか。

もはや会話なのか独り言なのかわからない。尾張さんは机の上で組んでいた手を膝元に下げると、それまでしゃんとしていた背中を椅子の背もたれに預けた。

小さい、小さい、壮齢の男性。この人は、これまでどのような思いでサンタクロースをしてきたのだろうか。

あと何年。

今年で終わるのだろうか。娘に真相を知られ、見られ、罵られ、嫌われ。信じることをやめてしまったら、それでサンタクロースは死んでしまうのだろうか。

「サンタって」

ふと、口に出してみる。サンタクロースって。

「もしかしたら、大人のためにいるんですかね」

じつと動かない尾張さん。それでも、思ったことを口に出してみる。

「確かにサンタって、子どもからしたら年に一度おもちゃをくれたり願いをかなえてくれたりってあるかもしれないですけど、やっぱりじきに疑っちゃうんですよね。ほんといにいるのか、とか。これ絶対親だよな、とか。

それでも、いざ自分が親になったら子どもに絶対に同じことするんですよ。それって、なんていうんだろう。年に一度、子どもに夢を与える、それが大人へのプレゼントなのかなって。朝にプレゼントを開けて喜ぶ子どもを見て、こっちにも幸せをお裾分けしてもらうのかなって。

……まあ、俺は親になるところかまだ彼女すらいなくてすけどね！」

顔が熱くなるのを感じて慌てて大声をだし冷たい空気を取り込む。いかんいかん、これ結構恥ずかしいやつだわ。

「大人への、か」

手で顔を扇ぎながら尾張さんを見る。尾張さんは膝の上



にただ乗せていた腕を組むと、黙りこくって思索に耽ってしまった。

「あの、尾張さ——」

「私は、どうしたらいいんだろうか」

確かに。さっきの俺の回答は、ほんの気休めにはなったとしても解決策は提示していない。

もう何度目になるのか、沈黙が流れる。警察からはまだ何の連絡もない。腕時計を見てみると、とうとう一一時を過ぎる頃合いだった。

突如、ポケットに入れていたスマホが震えだす。咄嗟に警察からの連絡かと思ったが、警察からの連絡は尾張さんに行くようになっていたのでその考えは打ち消される。

「げ」

通話元の表示を見て声が漏れる。

〈生部玻璃〉

「こんな時になんだったんだよ……」

「すみません、ちよっと」

柔和な笑みを浮かべ、無言でどうぞと言ってくれた尾張さんを尻目に通話ボタンを押す。

「何です生部先輩」

「何ですじゃないでしょあんた今どこいんのよ。あとそのヒソヒソ声聞きづらい」

「どこだっていいじゃないですか、俺『非モテ女の集い』とか絶対行かないっすよ」

「いやそうじゃないって」

電話の向こうからダダ漏れの溜め息。と、かすかに聞こえてくる——

「先輩、女の子でも誘拐したんですか」

「してねえよ」

女の子の鳴き声。

「店の前で女の子がずっと泣いてんの。せのちゃんって子。さっきのあの子じゃないの？」

「あーごめんねーおねえさん電話してるからちよっと待ってねー」

「とにかく、あんたの方が事情よく知ってるだろうから、早く来なさいよ。じゃ」

ぶつり。

通話が切れると同時に尾張さんの方を向く。「彼女さんで

すか」と薄ら寒い冗談をかましてくるぐらいだから少しは落ち着いたのだろう。

「せのかさん、見つかったそうです」

俺がそう告げた次の瞬間には会計へ速足で向かい始めていた。

5

「おー、来た来たおっせえよ天堂君」

わー、ひどい言い様。

「お疲れ様です生部先輩」

「乙。そちらのお方は」

「せのかちゃんのお父さんです」

ふーん。

まじまじと尾張さんを眺める先輩。一方で尾張さんとはとうと先程からそっぽを向きっぱなしでいるせのかちゃんを前に、どうしたら良いものわからずにおろおろとしていた。

「せのか」

「……」

先輩の上着の裾をぎゅっと握るせのかちゃん。対して、二の句を継げないでいる尾張さんを前に、俺も先輩もどうすることもできずにいた。冷たい冬の空気が漂っている。

「……あの」

思わず耐えられなくなって口を開く。三人の視線が一気に集まってきて後悔した。実を言うと何も考えていない。

「なに」

先輩が返してくる。どうしてこの人は、俺を見るときにこうも目つきが悪くなるんだろうか。

「そうですね、その。——せのかちゃん、ちょっと、いいかな」

突然に話しかけたもので露骨にビビられる。些かの傷心を胸に彼女の視線に合わせるよう屈むと、先輩の影に隠れながらも、視線だけはじつとこちらを見つめてくれた。

「ありがとう。あのね、せのかちゃん。サンタクローズは、本当にいないのかな」

こくりと頷く。

「そうか。でもね、それは少し、間違っているよ」

尾張さんがはっとして俺の方を向く。先輩は俺のことを静観しながら、せのかちゃんの背中をゆつくりとさすっている。

「でも、トモちゃんが」

「うん。だから、それはその友だちが間違っている。サンタクロースはね、いるんだよ」

せのかちゃんの視線が動く。その視線の先にはきつと、彼女の父親がいることだろう。

「お父さんが気になるかな。うん。そう。せのかちゃんのお父さんはね、サンタクロースなんだよ。でもね——」

不安げな眼差しが戻ってくる。彼女は今日、真実をその目で見てしまった。だから、俺も彼女には「真実」を伝えなくてはならない。

「サンタクロースは、お父さん自身じゃないんだ」

「ちがうの？」

少し、あまりの可愛さに笑みが零れてしまった。期待に満ちた表情。

「なんだ。この子のなかではもう、答えなんて決まってるんじゃないか。」

「あのね、せのかちゃん。サンタさんは、世界に一人しかいないだろう？ だから、一日で世界中を回るなんてことは、いくらあのサンタさんでもできないんだよ。だからね、そういうとき、サンタさんはどうしていると思う」

目を丸くするせのかちゃん。あちゃーと上から聞こえてくることをよそに、首を傾げて一生懸命に考えている。

「正解はね、これ」

そういうと俺はポケットからスマホを取り出す。

「スマホ？」

「そう、スマホ。これでね、サンタさんは、世界中にいるサンタさんのお友だちにこう言うんだ。『あの子にはこれをあげてやったらどうか』って」

「夢がない」

「そうかな？ でもそれにはね、深い、深いわけがあるんだ」

「わけ？」

「そう、わけ。」

昔はね、サンタさんもみんなのもとにちゃんと回って、一人一人にちゃんとプレゼントをあげていたんだ。それは、

みんなの中でサンタさんがずっと身近で、逆にサンタさんにとつてもみんながとて身近だったから。でも、最近はお友だちがそうだったみたいにサンタさんの存在を疑う子が出てきちゃって、サンタさんは身近な存在じゃなくなっちゃった」

真剣に耳を傾けてくるせのかちゃん。そして、尾張さんもまた、こちらをじっと見届けていた。

「サンタさんはね、みんなの一番欲しいものをプレゼントしなくちゃいけないよね。でも、今のサンタさんにはそれがわからない。みんなとふれあえないから。でもかわりに、そうしてお仕事を、お父さんお母さんにしてもらうようになって。お父さんお母さんの方が、みんなのことを、よくわかってる。みんながどうしたら心から喜んでくれるのか、よくわかっている。そうしてみんな笑顔になって、そしたら、サンタさんも嬉しいんじゃないかな」

「サンタさん、信じたら来てくれる？」

「いや、サンタさんはもう来てくれない。でも、ずっと、みんなの顔を見てる。お父さんお母さんがサンタさんに報告するんだ。喜んでくれましたよ、楽しんでくれましたよ」

よ、笑顔でいてくれましたよ。それを聞いて、サンタさんは、じゃあ来年も頑張ろうってなるんだ。だからね、サンタさんをつかりさせちゃだめだ。お父さんお母さんも、せのかちゃんと一緒、サンタさんの大事な大事なお友だちなんだから」

「お友だち？」

「そう。お友だち。ちょっと会いに行くのは大変だけどね。だから今度、お父さんお母さんにお手紙を預けてごらん。きつとお返事が返ってくるよ」

「本当に？」

瞳を潤ませ、純な眼差しを向けてくる。先程まで先輩の上着を掴んでいた手もすっかり離れ、彼女はその両足で、しっかりと地面を踏みしめて立っていた。

「ああ、本当だよ。なんせ俺も、会ったことあるからな、サンタ！」

親指をグッと立てて笑ってみせる。せのかちゃんは一気に弾けるように「うん！」と大きな声で言う。お父さんのもとに駆け寄り一言「ありがとう」と言いつつ次の瞬間には抱っこをせがんでいた。

「会ったことあるんだ、サンタに」

尾張父娘がクマのぬいぐるみと一緒に女の子向けの便箋を買って帰って行った夜の一二時過ぎ。俺は先輩と駅へと向かい歩いてた。

「なんですか、急に」

「いや？ さっきの天堂君の言い方だと、そっかあ、天堂君リアルサンタさんに会ったことあるのかあ、と、思ってた」

にやり。横から覗き込むようにこちらを見てくる先輩だが、前髪が長いため微妙に目元が暗い。怖い。

「先輩、髪切ったらどうですか」

「話を逸らすな、逃げるな」

脇腹に肘鉄を食らわせてくる。これが結構痛い。

「いやでも、いいじゃないですか。リアルサンタって言ったって、尾張さんがそうだったってことで」

「なにそれ。つまんな」

「てかそれを言ったら先輩だってどうなんですか。サンタ

クロースはいるとかなんとかって言っていましたよね」

「んー？ ああ、あれね。いるよサンタ。なんでも北欧の、確かデンマークだったかな、には国際サンタクロース協会とかいのがあって、日本にもその承認を受けたサンタクロースがいるらしいのよ」

「それこそなんか夢がないですね……」

「あー、スマホサンタよりはよっぽどマシだと思うけど」

「あ、やっぱりそこ突っ込みます？」

「当然」

満足げに笑う先輩。俺はそうした先輩を横目に見ながら終電を確認しようと、今話題のスマホを起動する。やばい、マジで電池なくなってきた。

「あっ——」

ふとあることを思い出して立ち止まる。つられて先輩も二、三步進んだところで立ち止まると、どったの、と問いかけてきた。

「もう、クリスマス当日なんですね」

「ああ、そうだね」

「玻璃先輩、『非モテ女の集い』、もう始まってんじゃない

ですか」

腕時計を確認する先輩。あちゃー、と一声だけ発すると、なぜか急に俺の腕を掴んできた。

「ちよ、なんですか先輩、俺絶対に嫌ですよ『非モテ女の集い』なんて」

「さつきさ、天堂君あたしのこと『玻璃先輩』って呼んでくれたよね？」

「はい？」

「なんか調子乗ってるみたいで腹立つ」

言葉の意味が理解できずに混乱する俺をよそに、先輩は一人声のトーンを上げて宣言する。

「よし、これからあたしら二人で『非モテ男女の集い』を開こう！ これなら文句ないでしょ、さ、行こ行こ」

「や、意味不明ですし、それに——」

次の瞬間。軽やかなステップで先輩は俺のすぐ前に踊り出て立ち止まると、上目遣いでにたと笑い、言った。

「惰眠食ってもプレゼント、くれないんでしょう？ それだったらあたし起きてる！ ね、そっちの方が楽しいし、せっかくのクリスマスだし！ だからさ天堂君、今日は、

私と付き合っ。……ね？」

全く、プレゼントちようだい！ みたいなノリで言う。やっぱりまだまだ子どもじゃないか。先輩も、俺も。

「仕方ないですね。あと先輩、スマホの充電器持ってます？ 今充電切れそうで」

「持っていない！ サンタさんに頼めば？ スマホで」

「だから電池ないんですって」

肩をばしばし叩いてくる先輩。引き込まれるようについ笑ってしまう。

クリスマスの一日が始まる。俺たちはあと何年、サンタクロースに逢えるだろう。そして、サンタクロースになる日も、少しだけ待ち遠しいと思ってしまった。

月刊缶じうすクリスマス号 通巻204号  
2014年12月1日発行

編集人 張子

印刷所 広島大学 文団BOX